

南十字星

大阪大学外国語学部
(旧大阪外国語大学)
インドネシア語同窓会

2015年春 第20号

発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

電話 Fax 072-753-1693

Email: tani.kazuya.g@gmail.com

諸先輩の“遺産” 今後もしっかり継承

内原 正司 (1964卒)



「外務大臣表彰」を受けて

インドネシアで仕事をさせてもらって通算35年。もっと長期滞在の人がおられますが、周囲をよく見回してみますとやはり長い部類に入るのでしょうか。2000年から当地の「産業別懇談会」の会長を引き受けています。そして外務大臣表彰が決まり2014年9月8日、在インドネシア大使公邸で表彰状伝達を受けました。授賞推薦理由は、懇談会を通じて「日本とインドネシアの相互理解の促進」に尽力したということだそうです。

私にすれば、青天の霹靂（この言葉、今は悪いこと・良いこと、どちらにも使えるらしいです）。懇談会のお手伝いをしているうちに、かような仕儀となりました。大使の前で、“答辞”なるものを、しどろもどろで朗読して参りました。面映ゆくお恥ずかしい次第です。

私議にて申し訳ありませんが、経歴などを簡単に記します。1964年に大阪外大を卒業後、日商岩井を経て69年住友商事入社。1971年最初に訪れたとき、インドネシアはスハルト時代です。円借款第1号のTg.Priokの火力発電所を受注、この現場監督として現地に派遣されました。当時、外資導入が図られ、L/Cによる輸出入決済が盛んでした。インドネシアが経済破綻をきたして、多くの関係商社、メーカーが苦境に立ちましたが、そこはどっこいインドネシア流のお助がありました。損害を被った企業はインドネシアに投資した場合、



損金をキャピタライズ出来ることになり、これを機に多くの日本企業が進出して来たと言われています。

1984年から1988年間のジャカルタ駐在員としての時期を除き、アサハプロジェクト、電子磁性材製造会社、東芝ブラウン管製造会社と会社で最長記録の出向生活をいたしました。定年退職後、SECOM、武田薬品と移り、現在、住商Global Logisticsの顧問をしています。

産業別懇談会というのは、インドネシアに進出した日本の企業が業種の枠を超えて組織した団体です。現在約50社が加盟。初めの頃は、異文化によるギャップがある労使関係、社会環境の不安定に伴う労務問題が中心テーマでした。「自分が仕事で決断、実行した事が正しかったのかどうかの再確認」「決断事項が正しいかどうか」「正しい情報が伝えられているかどうか」「もっと良い知恵がないか」等々の情報交換です。そして労務、人事、総務、安全、衛生の問題にとどまらず、インドネシアにおける諸問題を会員の経験、意見、知恵を出し合い確認し合っています。自由な雰囲気で開催され、多くの問題解決につながりました。月例会議は午後7時から9時頃まで。そのほか毎年1回会員の中から希望者を募り、特に地方の企業、プロジェクトを訪問し研修しています。

答辞で触れました、懇談会発足時の概要をこの原稿の後段で付記させていただきます。初代会長の板坂勇夫氏(1947年卒)は、戦後インドネシアで最初の日系銀行を開設された我が南十字星会の大先輩であります。

また板坂氏とともに、懇談会発足の功労者だった東レの黒田憲一顧問は、年齢が私より5歳上ですが、私と同様にインドネシアを訪れた関係もあって、いろいろとご教示いただきました。講道館柔道7段、警察大学で将来将軍となる多くの生徒を教えられました。政治、軍、警察のトップとは純粋な気持ちでアミーゴとして付き合い、日本人社会の政府と民間の強い絆を築いて来られた人です。実は私の会長就任は、顧問の強い要請があったからです。

現在でこそ、インドネシアのどこにでも行くことが出来ます。ただ、ひと昔前は治安が悪くてそう言う訳には行きませんでした。黒田顧問の柔道の教え子が行く先々で司令官をしていて、安心できました。長いインドネシア滞在中、好きな旅行によく出かけ、インド



ネシアの全34州を数回にわたって訪れています。満天の星の下で、人生や日本とインドネシア



のことを、さまざまな人々と語り合いました。

インドネシアを知るには、ジャカルタだけではなく地方を見ること、それも同じ所を度重ねて行くのは大切でしょう。以前の状態と比較すれば、その変わりよう、発展振りを理解出来ます。スハルトが開発を、ユドヨノが地方分権をと言った場合、回を重ねて見ることによってその実態が初めて確認可能になると、改めて認識した次第です。このように偉そうに言っても、本当にインドネシアの人々の生活に入り込んでいた訳ではなく、奥深いインドネシアを知っているかと問われれば、“ノー”となります。



◇答辞の要旨(2014年9月8日)◇

PT.Sumisho Global Logistics Indonesia の内原正司です。この度は大変なご厚情を賜り身の引締まる思いです。誠に僭越ながら、産業別懇談会を代表しまして謹んで表彰を賜り、答辞を述べさせていただきます。

産業別懇談会設立のきっかけは、日系繊維合弁企業の親睦会として古い歴史を持つ「アヒル会」の活動でした。1982年頃同会の研修旅行が計画され、行き先は当時、日伊のモニュメントとして脚光を浴びて操業開始直後のAsahan Project (INALUM= PT.Indonesia Asahan Aluminium) でした。結局、有志だけの旅行となりましたが、その研修後、INALUMの川口理宏総務部長が「日系企業がこれだけ多く進出している折、労務問題等でイニシアティブを取れるよう会ができないのか。検討して欲しい」と提起されたのです。

同会の会員でもあった黒田顧問が、就業規則作成に関し板坂勇夫氏(Meiwa)に相談され、共感を得ました。日頃懇意の会社に声掛け。これが産業別懇談会の始まりです。

第1回(準備会)は1983年9月、Jl.Bloraの中華料理店“Prince”の2階に7社(Meiwa、ITS東レ、武田薬品、IWWI、TIFICO(帝人)、INALUM、住友化学)の代表者が集まり名称、開催日、幹事、会議進行方法について検討しました。その後、会員が増え40社となり、1994年8月に幹事団を設置。新しい体制での産業別懇談会がスタートしました。開催場所もBisma Nusantara、Hilton、日航ホテルと変化しました。現在会員は会場のスペース制限上50社となっています。

歴代の会長(敬称略)は初代、板坂勇夫(Meiwa)▽2代目、南浦基二(INALUM)▽3代目、堀紀久男(TIFICO)▽4代目、齋藤忠義(INALUM)▽5代目、森田健(TIFICO)▽6代目、安東晋司(東レ)。そして7代目が内原正司(SGL、2000年7月より現在まで)です。

諸先輩方がこれまで築き上げて来られた産業別懇談会を、これからも会員の皆様と共に継承して行きたい所存でございます。

【写真説明】1頁の表彰。⑥は当時在任中の鹿取克章・駐インドネシア日本大使。2頁目の左側は④旅行愛好グループ“秘境の会”のジャカルタ市内ツアーで。歴史博物館前(オランダ時代はシティーホール)=2013年5月⑤スンダ海峡で噴煙をあげるクラカタウ火山(Anak Krakatau)=2011年8月。右上は産業別懇談会の月例会議の風景=2014年11月

寄稿

Apa & siapa

峠を越えてもまだ坂がある 神経難病の診断

岩谷 英志 (1964 卒)

2014年11月に診断された、聞き慣れない病名だ。「脊髄小脳変性症」。足のバランスが取りづらく、歩くとふらつく。杖や他人の手助けが要る。跳んだり、走ったりするのはとてもムリ。手の動きもぎこちない。動きが緩慢になる。今の大きな私の症状である。要するに、運動機能に関係した小脳などの神経細胞が破壊されて萎縮、変性して動作の細かな調整ができなくなっているのだ。MRI検査では、小脳とつながる脳幹や脊髄は、まだそれほど“悪化”していないらしい。とはいえ、厚労省の指定難病のひとつ。原因が解明されておらず、治療法も確立されていない。気は重い。

薬(セレジスト錠)は大して効果はないという。でも、気休めのため服用している。現状維持を保つには、今のところリハビリの運動療法ぐらいしかない。この3月から週3回、送迎付きのリハビリ・デイサービスの利用を始めた。指定難病なので訪問リハビリも受けられる。家庭では、足のふくらはぎを鍛える「ストレッチボード」や足首に巻きつけて負荷をかける「アングルウエイト」なども使っている。「これは良さそう」という情報には、すぐ飛びついてしまう。

それまで何度か他の病院で調べてもらったけれど、進行が遅いせい、ある程度悪化してからでないと病気診断がつかないのかもしれない。4年ほど前から、歩行があやしくなっていたのを自覚し、体育館のジム通いをしてきた。自宅から体育館までは約1^{km}の下り坂だ。その坂を歩くのにも、転倒の危険を感じるようになってしまった。今は中断している。

実を言うと、もっと以前はかなりの“足自慢”だった。1994年から8年間はマラソンに熱中し、各地の市民マラソン大会にも参加していた。年齢では50代から60代前半。それが、走るどころか“足で悩む”ことになるとは。人生の先行きは分からないものだ。

マラソンの一番の思い出は、富士五湖を走る「チャレンジウルトラランニング」。1998年4月25日、ビギナーズ種目の80^{km}に参加した。高低差は1^{km}ほど。制限時間は11時間。午前8時に出発して午後7時にはテープを切らねばならない。給水所のほか、数カ所にエイドステーションが設けられていて食べ物のサー

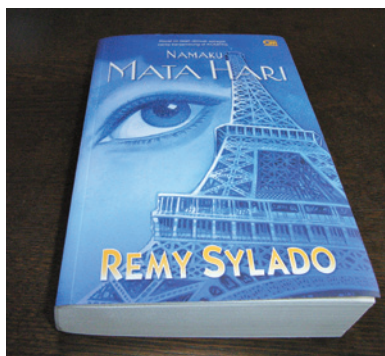


ビスを受ける。“応援ツアー”と称して妻も同行した。バスで先回りしていた妻と短い会話をし、また走る。

走行距離を80歳人生になぞらえ、もう50に達したなあ、などと走りながら考えていた。フィニッシュ地点はスタートと同じ富士北麓公園競技場。何とか戻ってきた。日が暮れてしまっている。太い白いテープが近づき、胸のナンバーカードをチェックしてマイクで名前を呼んでくれる。バンザイをしながら時計を見た。10時間41分58秒。制限時間に余裕のセーフだった。「フルマラソンのほぼ倍の距離。完走の感激度も倍だ」そんな屁理屈も口にする。自然に涙がこぼれた。

語学は、マラソンを走るのにも似ている。今は走れないけれど読書は大丈夫だ。インドネシア語の原書を読むのも、病院通いなどで一時中断したあと、趣味の続きとして再開した。タイトルは『Namaku Mata Hari』。著者のRemy Syladoは、私より少し若いだけで、経歴が同じ元新聞記者。本を読んでいるかぎり、とても博学で、語学も達人だと感じる。小説のテーマは、ご存じ、ドイツ・フランスの二重スパイをすることになった女性の経緯と背景。これまで何度か映画化され、本も出版されている。でも、主人公の女性ダンサーの生き様や男性との関係・からみ、そしてインドネシアでの話をこれほど詳しく描いているのは初めてとか。内容はけっこう面白い。私の場合、辞書を引きまくり翻訳した文をパソコンに保存しているので、スピードは超ノロノロ。500ページを超す長編。途中で“棄権”することになっても、それはその時のことだ。

しかし、責任を負う仕事は、途中で放棄して迷惑をかけるわけには行かない。やることも選ばざるを得ない。南十字星会の会報編集担当は20号発行を1つの区切りに、辞めたいと申し出ている。





キャンパス便り

言語文化研究科 准教授 原 真由子
准教授 菅原 由美

(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

語劇祭

今年度(2014年度)の語劇祭は、2年ぶりに箕面キャンパスに戻り、また開催時期も豊中キャンパスの「まちかね祭」(11月初旬)とずらして11月22日(土)、23日(日)の日程で開催されました。「まちかね祭」と重なるとサークルの出し物などで語劇に参加できない学生がいましたが、時期が異なることでそのような問題はなくなりました。インドネシア語専攻は、例年通り2年生が中心となり、“Putri Salju dan Enam Kucaci”(白雪姫と6人の小人たち)を上演しました。本当は7人のこびとですが、小規模な専攻語ゆえ、人数が足りずに6人となりました。また、インドネシアの物語ではなく、本来の設定は西洋ですが、こびとたちがそろってクバヤを着て



いたり、女王の使いがバティックを着ていたり、少しインドネシア的雰囲気醸し出した、独自の白雪姫となりました。(舞台の背景はスライド映像で、効果アップが図られています)

インドネシア語スピーチコンテスト

11月23日(日)に開催された南山大学主催のスピーチコンテストに、1年生の李忠起さん、吉村星梨花さんの2人が出場しました。9月に行ったアチェへのスタディツアーで得た体験に基づいて、イスラムや異文化理解などの理解と見方が大きく変わったことを述べ、李さんが2位を獲得しました。他の参加者の発表にも大変刺激を受け、さらにインドネシア語を上達させたいという思いを強くしたようです。

3大学合同ゼミ

10月11日(土)、12日(日)、南山大学、東京外国語大学、大阪大学の3大学のインドネシア語専攻の学生有志が、南山大学に集まり、合同発表会を行い

箕面市連携講座



2月1日(日)、キューズモール箕面にある箕面市民活動センターにおいて、箕面市と外国語学部との共催で、インドネシア語専攻の学生が市民を対象に学生が学んでいることや現地で体験してきたことを発表する講座が開かれました。昨年に続き2回目です。学生は卒業論文の内容に基づき、「ハラール認証の問題」「バリにおける日本人とインドネシア人の国際結婚」「インドネシアのBOPビジネス」「マレーシアのアニメ」について発表し、後半の座談会では参加者に現地のコーヒーやお菓子を紹介しながら、インドネシア事情や大学についての質問に答えていました。



ました。春頃から3大学の間で発表の内容やプログラムなどを打ち合わせてきました。

初日は、南山大が「インドネシアの教育」、東外大は「日本のハラール」、阪大は「イスラムファッション」というテーマで発表し、互いに活発に意見を述べ、普段狭い専攻語の中にいる学生が視野を広げる良い機会となりました。

翌日は、南山大の学生の案内で、名古屋の町を散策しながら、インドネシアを学ぶ仲間として交流を深めました。

《海外研修》 カップリング インター シップ プログラム (原)

第18号の会報でもご紹介したように、2013年度から阪大接合科学研究所(接合研)と言語文化研究科・外国語学部が主体となり、文部科学省の特別経費プロジェクト事業「広域アジアものづくり技術人材高度化拠点形成事業」の実施を開始しました。その事業の1つが「カップリングインターシ

ッププログラム」(CIS)で、本学の理系・文系学生各2名、現地大学理系・文系学生各2名の合計8名をカップリングさせ、アジア地域の現地日系企業で研修を行うことでグローバルな人材育成を目指すというものです。

2014年度は、前年度のタイ、ベトナム、インドネシアに加え、マレーシア、インド、フィリピン、カタールの計7カ国で実施しました。インドネシアは、前年度と同じ組み合わせ、つまりインドネシア大学と共同し、研修先としてコマツ・インドネシアにご協力いただきました。参加者はインドネシア大学工学部2人(女子)、日本語専攻2人(男女1人ずつ)、阪大工学研究科2人(男子)、インドネシア語専攻2人(女子)です。時期は、8月14日から27日の2週間。

まずはインドネシア大学で事前研修を行い、途中独立記念日の雰囲気を楽しみ、残りはコマツ・インドネシアでどっぷりと研修の日々でした。会社説明や工場見学をふまえ、自ら課題を設定し、現場の指導者や工



員の方々にインタビューなどを行いながら、問題解決策の提案に取り組みました。文系・理系という分野の違い、日本語とインドネシア語という言語の違いをもつ学生たちは、少しのことで全員が理解するまで時間がかかり、日本語、インドネシア語、英語がとびかい、ジェスチャーや絵も駆使していました。最終日には課題の検討結果について経営陣や大学関係

者の前でプレゼンテーションし、様々なコメントを頂きました。

両大学の学生は、文理そして日本人とインドネシア人の共同作業がいかに大変か、同時にそれがいかに大切か、身をもって体験できたと思います。

《海外研修》アチェ合宿 (菅原)

9月22日から30日に、アチェの国立イスラム大学アル・ラニーリ校で「インドネシア社会体験合宿」を行いました。今回は、大阪大学未来基金グローバル化推進事業海外研修プログラム助成金に一部補助をいただき、インドネシア語専攻1年生9名、2年生8名、3年生1名、文学部東洋史3年生1名、文学研究科修士1年生(中国人留学生)1名の計20名が合宿に参加しました。

まず、ジャカルタに到着し、次の日ジャカルタ市内を見学し、晩に大阪外国語大学OBとの懇親会。翌日、ガルーダでバンダ・アチェ入りしました。学生たちは大学の学生寮に滞在し、アチェの学生たちに囲まれて1週間を過ごしました。大学の授業に参加したり、日本から準備してきた宗教に関する発表会を行い、意見交換をしたり、アチェの津波跡地の見学をしたりしました。



また、インドネシア最西端のサバン島に渡り、非常に美しい海と島中に敷設されている旧日本軍基地跡地を見学しました。最終日にはアチェでの体験をインドネシア語でイスラム大学の学生や教員の前で発表し、その日の晩には日本とインドネシアで盛大な文化交流会が開かれました。

学生たちは、最初は慣れない寮生活に戸惑い、泣き出してしまう学生もいました。また何と言っても、宗教の考え方の差異に驚かされるころが多かったようですが、次第に打ち解けていき、アチェでの生活を満喫していました。イスラム大学側にとってもこのような機会が初めてであったた

めか、教員・学生ともに精一杯の歓迎をしてくれました。学生たちは帰国後もFBやLINEなどでアチェの学生たちと交流を続けています。

寄稿

Apa & siapa

神戸インドネシア語 学習会を主宰

沖 政夫 (1966 卒)

「神戸にインドネシア語を勉強する会があったんか?」「どんな会や?」「たいそうな名前やけどちゃんとした会なんか?」などなど、皆さんが疑問に思われる会を開いております。

こじんまりした趣味的な学習会にもかかわらず、このたび皆さまに知っていただく機会を頂きましたので、私とインドネシアと言うか、インドネシア語との関わりから生まれたこの会の設立経緯や活動内容をお話致します。(㊦は学習会の風景)

インドネシア語科を66年に卒業後、会社定年まで、私はインドネシアとは全く縁のない生活を送って来ました。インドネシア語に接する機会も場もなく、私には英語を使う仕事ばかりが回って来ました。でも、同級生の仲間との楽しい思い出は卒業後もあせることなく、インドネシアにはずっと興味・関心を持っておりました。

そんな私が定年を迎え、時間に余裕ができたので何かしたいなと思っていた時に、「神戸シルバーカレッジ」(3年間)にインドネシア語クラブがあると知り、インドネシア語に対するなつかしい思い出と、もう一度インドネシア語を楽しみたいという気持ちが湧き出てきたのです。2001年に同カレッジの国際交流コースに入学し、即インドネシア語クラブに入会



しました。ここから私のインドネシア語に関わる第2の人生が始まりました。

2003年に同校のインドネシア語クラブを通して出来た仲間15名と「スラバヤNICEセンター」(当地で日本語、日本文化を広める活動をしている施設・スラバヤ大学教授が運営)との交流のためスラバヤを訪問、3日間にわたり交流活動をしました=写真㊦中央が筆者。

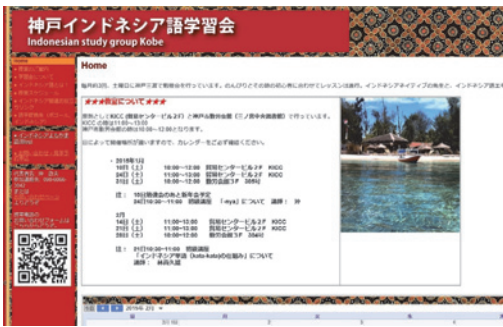
その折、ジャカルタにも寄り、同級生のO君に大変世話になりました。インドネシア在住ウン十年のO君のインドネシア人並み、いやそれ以上の達者なインドネシア語に触れ、感心し、刺激を受けたのを今でも鮮明に覚えています。

2004年~2006年まで神戸でインドネシア人の開くインドネシア語教室に入り、勉強を続けていましたが、2006年にこの教室のインドネシア人講師が帰国され、教室がなくなるのを機会に、新たに私とインドネシア人(女性)講師とで今の「神戸インドネシア語学習会」を開講し、現在に至っております。



学習会は月3回、土曜日だけ。神戸・三ノ宮の貿易センタービルと神戸市勤労会館で開催。ウェブサイト

(<https://sites.google.com/site/kobeindoneshiago/>)



カレンダー付きで場所を記しています。毎回2時間「ゆっくり、楽しく」

をモットー

にインドネシア語を学んでおります。授業料は1回1500円。原則、入門・初級者に合わせた内容です。市販されている書籍の中から選んだ1冊をテキストに使っています。

テキストに入る前、各自3分程度インドネシア語で話す自由発表の時間を取っています。表現に困ったことや、間違いをインドネシア人講師が訂正。また、私の作成した宿題の答え合わせをします。各自が答えを黒板に書き、それを皆で加筆修正し、インドネシア人講師にコメントをもらいます。

参加者は個人のレベル差があります。中には中・上級者もおられます。クラスを2つに分ける余裕のない旨を承知して入会してもらっているのですが、特にベテラン熟達者の方には自らの勉強を兼ねて月1回30分、初心者への無償講義をお願いしてもらっています。内容等は私と相談の上決めています。

仲間はいろいろですが、皆さんインドネシア人とインドネシア語で話したいという共通の動機を持っています。登録会員数は約50名です。年齢層40～50歳代の主婦が最も多く、30～40歳代



の会社員男女、60歳代以上と続いています。仕事を持っている人は、仕事優先で毎回出席出来る人が少なく、勉強会当日の参加者は毎回10～15名程度です。

勉強会の傍らボランティア活動として、インドネシア人講師とコンビで神戸市の小学校に出向き「インドネシアってどんな国？」と題して子供たちに話をしたり、質問を受けたりしてインドネシアを知ってもらう活動もしています。(写真はインドネシア式ジャンケンを教えているところ)



また、2013年1月にはボゴールにある日本語教室を開講しているPT Sanshiro “In-house Training Center”と語学交流の提携をしました。同校は昨年後半からスカイプを使用してオンラインで日本語・インドネシア語を勉強出来るシステムを構築中で、当会もこれに参加する予定です。まだテスト交信の段階です。お互いにパソコンの画面を見ながら、私とインドネシア人の日本語の学生と30分ほど話をしましたが、画像と音声はなんら問題ありませんでした。(☎はSanshiroの講師スタッフ)

昨年には元大阪外大の先輩・後輩3名が入会され、レベルが突然高まりました。当会の活動範囲も広まって、インドネシア語の語学力を生かす場が出てきました。神戸市財団法人・神戸国際協力交流センターに当会から私を含め4名が、多言語サポーターに認定され、活動を開始することになりました。ボランティアで来神戸・在神戸のインドネシア人の手助け(移民局とか市役所での通訳が主)をします。

これからも当会の仲間とともに、インドネシア語を通して草の根での文化交流が出来るようにしたいと思います。

特別寄稿

Apa & siapa

日本語との出会い

Pika Yestia Ginanjar

(2013 大学院修士課程・言語文化
研究科修了→博士課程)

私が初めて日本に来たのは 2008 年の秋でした。私にとって日本での生活は生まれて初めての一人暮らしでした。それまではずっと家族と一緒に暮らしていたのです。家族から長い間離れたことのなかった私が、一人で遠い日本に留学すると言いだした時、両親は信じられない様子。「どうせ本気じゃない」と思っているようでした。しかし、一次予選の試験を通過、第二の試験にも受かってから、ようやく私の本気に気づき、慌て始めました。母はなかなか賛同をくれません。私を心配してくれたからでしょう。本当に行くのかと何度も聞きます。私もなんども同じ答えを繰り返しました。それで、最後には気持ちをくんで、行かせる気になってくれたのかもしれない。

当時、私は願いがかなって、嬉しさのあまりに何にも心配していませんでした。言葉に関しても、ある程度の日本語の能力を身に付けていましたから、なんとかかなるだろうと思いつ込んでいました。事実、日本での生活には不自由はありませんでした。もちろん今でもまだ分からない単語は次々出てきますが、それも勉強の過程の一つだと思っています。

日本語と出会って、いろんなことを学んでいると思います。言葉はもちろん、言葉を通じて、日本人の考え方、習慣、文化なども“本場”で学ぶことができ、自分は恵まれているとしみじみ感じています。日本人の礼儀正しさについては言うまでもありません。また、日本人が時間厳守なところも、すでに全世界に知られていると思います。

私は、一度帰国したこともあって計 4 年余り日本に住んでいますが、日本人の時間の感覚は、未だについていけない気がします。たまに約束の時間を遅れるは、ときどき大学にも遅刻するは。自分なりに頑張っについて行こうと心がけてはいますが、なぜか、未だになれていません。「時は金なり」は、確かにその通りだとよく実感します。バスの時刻に間に合わなくて、仕方なくタクシーを拾ったことがあります。も

のすごく運賃が高くなりました。バス代の 10 倍も掛かってしまい、とても反省しました。「時間を守らない分、金を取られてしまった感じ」でした。

それから、国の言語への愛着のことです。私には、少し意外に感じたことがあります。

まず、日常に使われている言葉からでも分かると思いますが、日本人は日本語だけを話します。どういうことかと言いますと、例えば、英語がどれだけできて日本語を話すときは、日本語化した単語は別にして英語と混ぜたりはしないでしょう。年寄りでも若者でも。それに比べて、インドネシア人は特に若者の間では、できるだけ英語を混ぜて話すという印象が強いのです。結果、正しいインドネシア語ができない人が増えてきているのではないのでしょうか。これに関しては、もっといろいろな要素があると思います。でも、恐らく、インドネシア語を大事にしないインドネシア人が少なくないからと言えるかもしれません。

日本人は自分の国を誇りに思っているという印象を受けています。誇りに思っていないくても、よくないこと、まして侮辱するようなことは言わないでしょう。一方、インドネシアでは、自国のことを良く思っていない人が私の知り合いでも何人かいます。その人達はただ単にインドネシアのことを知らないだけだ



と私は思います。

”Tak kenal maka tak sayang”とよく聞きますが、まさにその通りですね。私も初めは、インドネシアはただ母国であり、特に、好きでもなかったけれど、日本語を学んで、日本に来て、日本人と知り合ったおかげで、母国や母語のことを振り返るきっかけとなりました。今は日本のこともインドネシアのことも、知れば知るほど、好きになっています。

【写真説明】㊦は 2009 年の成人式の帰りに㊧は 2014 年アンクルン演奏後、Sanggar Budaya PPI の仲間と。筆者右端



コミック「Detektif CONAN」

編集部

意外な教材になる。インドネシア語版のコミックである。日本で出版された人気コミックは、世界各国に広まっている。留学生らには珍しくないだろうが、手元にそのひとつ「名探偵コナン」(青山剛昌・作)のインドネシア語翻訳本の第 63 巻がある。知人がインドネシアで買って来てくれた。これまでコミックには見向きしなかった。しかし、開いてみて興味が湧いた。推理をネタにしたインドネシア語「絵付き会話集」みたいなものだ。

同じ巻の日本版を書店で買い求めた。比べてみる。日本版は右から順にページをめくり、コマも右上から左下へ進む。ところが、インドネシアでは逆の「左開き」である。絵の向きも、鏡で見るように左右反対になっている。なのに、全く違和感はない。ただ、この「コナン」は、ナゾ解きが多く、左右の違いが鍵を握るシーンもある。よくよくチェックしてみたら、そういう肝心のコマだけは左右が原画と同じ向きにしてある。当然の配慮なのだろう。

セリフの吹き出し部分は、双方同じ大きさだ。表意文字の日本語より、通常は翻訳版の方がたくさんスペースを取る。その違いの解決策は、字の大きさを幾らか小さりにすることで対処していた。



「事件現場」は TKP。これは Tempat Kejadian Perkara の略である。

そして、セリフで「けど、高校生は高校生!」は、Tapi, anak SMA, tetap saja anak SMA と訳されている (SMA=Sekolah Menengah Atas)。

年齢は、日本では姓名の次に (25) などと数字で書く習慣が定着してきた。新聞表記の影響だろう。インドネシア版では○○○○ (25tahun) と丁寧だ。

ちなみに、日本での第 63 巻の初版発行は 2008 年 11 月。インドネシアでは 2011 年だった (最初の著作権取得は 2002 年)。ストーリーは、組織に薬で体を小さくされた高校生探偵が難事件を次々解決していく様子を描いており、1994 年から漫画雑誌に連載開始。現在もロングラン連載が続く。単行本のほかテレビアニメで放映され、劇場映画にもなっている。

インドネシア語版のタイトルは「Detektif CONAN」。似たような人気のあるコミック本の「DORA-EMON」などより、吹き出しのセリフ部分がずっと多い。



コミックといえども、むずかしい言葉が出てくる。「専門語」があれば、スペースを取らないようにする略語表記も使われる。

例えば、「容疑者」は tersangka、「犯人」は pelaku、「出血」は perdarahan。接頭辞・接尾辞の勉強にもな



2014年度 南十字星会 総会

阪大中之島センターで 和やかに

2014年度の「南十字星会」総会を、11月9日正午から大阪・北区の大阪大学中之島センター9階で開催しました。今回は初めて大学の関連施設を使わせてもらいました。イスなどの調度品が豪華でゆったりとした雰囲気。ご来賓の福岡まどか先生、原真由子先生、サフィトリ・エリアス先生に加え現役学生12名も参加いただき、総勢45名の賑やかな会となりました。会員のスピーチの中ではインドネシア語も飛び出していました。



卒業生がお互いの旧交を温めるだけでなく、現役学生とも一緒に“交流”を図ることを狙ってきました。学生たちは数年後には会員となり、教員はその“橋渡し”役を務めていただく重要な存在です。

年配の卒業生と学生では親子、いや祖父母と子ほど年齢が離れています。それでも、年の差など関係なし。あちこちで談笑が交わされ「久しぶりにナマのインドネシア語をたくさん聞いた」という声も聞かれました。会場には比率で

みますと、若い人ら女性の姿が目立ちましたが、近い将来日本はもっと女性が進出する社会になるはずです。

総会ではまず、福岡先生(写真⑧)から「性を超えるダンサー:芸術家の活動から考える現代インドネシア社会」をテーマにパワーポイントを利用した講演をいただきました。華人系のジャワ人でインドネシアの著名な女形ダンサー、ディディ・ニニ・トウォさんについて、福岡先生は2014年5月に著書を出版(⑧本の表紙)されており、仮面を使う彼のユニークな舞踊や奥深さを説明。さらに多民族のインドネシア社会の中で民族アイデンティティ、特に華人の文化表現について触れ、身体表象とイスラム教的価値観とのかかわりと話を展開されました。

最近のキャンパスに関する報告、ジャカルタ支部からのメッセージ、参加者からの近況報告、学生諸子の頼もしい一言、そして締めくくりは恒例のインドネシアの歌の合唱。約3時間、なごやかに楽しい時を過ごしました。



1. These Words of Didi Nini Thomok
ディディ・ニニ・トウォの舞踊-ワヤマンの魂
2. Street Music Yogyakarta
ジャバの街角のジャジャカルタの鼓手トディディの歌
3. Didi Nini Thomok Interview
福岡まどかによる福岡のインタビュー

ご報告

会長 宮崎衛夫 (65 卒)

2014 年は、隔年に開いている「南十字星会」総会を、11 月 9 日に開催しました。(→10 頁)
 また、11 月 15 日には、咲耶会総会が東京学士会館で開催されました。東京での総会は初めてでしたが、総参加者 130 名の内、インドネシア語科からも 12 名の方に参加いただきました。シンポジウムで西田達雄さん(60 卒)からインドネシア語の“少なすぎる定員問題”を訴えていただいたのは、出席した大学関係者や卒業生全体に看過できない課題であることを知らしめる良い機会となったと思っております。



後藤淑子(84 卒)=池田市

2014 年秋に 11 日間のインドネシア 1 人旅に出かけました。写真はバンドンでの 2 枚です。㊦は庶民の市場の鶏肉売り場。生きた鶏と精肉が一緒に並べられていてビックリ!㊧は美しいオランダ時代の建物。今も郵便局として使われていました。(iPhone で撮ったものです)

消息

ひとこと (敬称略)

池永義啓(41 卒)=札幌市

(14 年 10 月 20 日)「そろそろ冬支度に掛からねばと少し暗い気持ち」

富松幸二(46 卒)=岐阜県山県市

「長年にわたり会報を届けていただき有難うございます。父幸二は高齢のため、今回をもっておつきあいを遠慮させていただきます。会のますますの発展をお祈りいたします」(ご家族より)

坂坂勇夫(47 卒)=東京都杉並区

米寿の祝いにキンキラ節を歌っています。南十字星会の幹事諸氏のご苦勞に感謝します。

高橋良一(49 卒)=西宮市

何とか元気で頑張っています。

奥田忠志(50 卒)=西宮市

胃と肝臓のがん治療に追われています。「余生を明るく生き抜く」覚悟です。

原 勝利(50 卒)=千葉県佐倉市

家内が 2014 年 4 月 12 日になくなり、今は独居老人です。

池田英彦(55 卒)=神戸市

会長ほかスタッフの方々のご奉仕に感謝しております。

磯田良一(55 卒)=さいたま市緑区

南十字星会のお世話ありがとうございます。現役として毎日元気に働いています。会のますますの発展を心から祈念いたしております。

服部英樹(56 卒)=三重県四日市市

「南十字星」を拝読するのは、私の人生の楽しみの 1 つであります。

西村耕二(56 卒)=枚方市

昨年春に右膝を痛めました。

磯浦美恵子(58 卒)=吹田市

昨年 8 月には東京支部のご招待をうけ、後輩・教え子の皆さんとお会い出来ましたこと大変嬉しく思います。ますますのご活躍を祈ります。

中村 徹(58 卒)=高槻市

高槻城址(外大高槻学舎跡)近辺の散歩が日課です。

山口 寛(58 卒)=枚方市

1960~70 年代を過ごしたほほ笑みの国、タイに魅了され足かけ半世紀。おかげさまでタイの“SUGAR KING”と言われる AREE さん一家とは 3 世代に亘る親交を結ぶまでになっています。アジアの時代の先駆けを目指し、いつまでも“青春”が謳歌できればと思う日々です。

前田正一(59 卒)=神奈川県鎌倉市

相変わらず環境関係のお手伝いと農園仕事で元気しております。

西田達雄(60 卒)=調布市

待ちました!19 号に高岡さんの登場。JKT でお世話になった 1 人です。皆でサポートし“南十字星”誌の継続を!

道廣健吾(61 卒)=東京都大田区

昨年は病魔に取りつかれました。正月から肺の病で入院生活をしたら、夏には胃ガンでまた。秋になって退院したばかりです。

森 啓子(61 卒)=大阪市

ボランティア活動をやっています。

山下 進(61 卒)=京都府宇治市

趣味のバードウォッチングでマレーシア訪問を計画中です。語学が殆どダメですが、少しはトライしてみるのが楽しみです。

小原一浩(63 卒)=大阪狭山市

生涯現役!! 4 月の統一地方選に再び挑戦します。

堀田 実(63 卒)=千葉県船橋市

後期高齢者用の運転免許切り替えに際し認知度テストがありました。何とかパス。ホッとしています。

稲村芳関(65 卒)=奈良市

昨夏、10 年ぶりのバリ島旅行。随分発展していますね。また行きます。

扇谷竹美(66 卒)=千葉県佐倉市

インドネシアから日本に生活のベースを移して 3 年となります。落ち着きも取戻し、忙しく立ち回っています。

朝倉俊雄(67 卒)=横浜市戸塚区

19 号を楽しく読ませてもらいました。現地で活躍する卒業生の話やキャンパス便りなど、内容が盛りだくさんで飽きさせません。編集者の皆さんに感謝です。次号も楽しみにしています。

奥 文昭(73 卒)=浜松市

2009 年末、37 年勤めた会社を定年退職。現在は 1 年の大半を信州の別宅で野菜作りに励んでおります。

阿部直子(74 卒)=千葉県船橋市

大学の名称も所在地も変わり、卒業以来ずいぶん時間が経ちました。南十字星会だけは変わらず、嬉しいことです。

廣澤義幸(76 卒)=大阪市

会報の発行作業、ご苦勞様です。ウィドド大統領のもとでの民主主義の前進に注目しています。

大角幸彦(77 卒)=市川市

2014 年 1 月から、転居、転職。還暦を機にまだまだチャレンジを続けます。

石井千恵美(92 卒)=世田谷区

毎号楽しみに拝読しております。言葉は使わないと忘れてしまい、今やすっかり錆びついています。

◆おくやみ申し上げます◆

下記の方々の訃報が届きました

六岡康二(39 卒)=兵庫県宝塚市 14 年 1 月

森本 勉(46 卒)=兵庫県神戸市 12 年

井上安寛(48 卒)=兵庫県加古川市

14 年 1 月

高木正之(48 卒)=奈良県生駒市 14 年 9 月

橋本礼一郎(50 卒)=豊中市 12 年 10 月

疋田千之助(51 卒)=茨木市 14 年 4 月

橋本圭司(57 卒)=豊中市 14 年 9 月

竹原茂和(63 卒)=兵庫県尼崎市 14 年

浜浦義典(65 卒)=奈良県 14 年 10 月

武智博行(75 卒)=江東区 15 年 1 月